

# 異文化理解のための創作英作文の指導方略

—水産学部海洋異文化交流論での実例—

坂 本 育 生\*

(2000年10月13日 受理)

## On Teaching Strategies for Creative English Composition for Cross-Cultural Understanding

— an Example from the Marine Cross-cultural Communication  
Course in Faculty of Fisheries —

SAKAMOTO Ikuo

### 緒 言

1999年12月に提出された、日本外国語教育改善協議会（略称「改善協」）作成による「日本の外国語教育の改善に関する提言」によると、その第1項目の「教育・外国語教育のビジョンについて」、特に、「国際化の進展に対応した教育」を進めることが必要であり、それは「広い視野を持って異文化を理解し、異なる文化や習慣をもった人々と偏見を持たずに自然に交流し共に生きていくための資質や能力の育成を図ることをならいとするものである」と明確に記されている<sup>1)</sup>。

しかしながら、四方を海に囲まれ、国境を持たない我日本においては、歴史的に見ても、異民族、異文化さらには異言語との接触は困難を極め、そのことが日本人が外国語習得が不得手である理由のひとつと考えられている。近年、国際化・国際理解・異文化理解の育成が多方面から叫ばれているが、日常生活では日本語のみで十分に生活できる日本の大学生にとっては、一口に異文化理解といっても、なかなか理解し難いことであった<sup>2)</sup>。

本研究は、筆者が担当している、鹿児島大学水産学部「海洋異文化交流論」の授業においての、ひとつの異文化理解の指導事例である。概して、海外との接触が極めて重要な水産学部学生にとっては、留学生との接触や、乗船実習、海外渡航などの経験から、異文化・異民族・異言語に接する機会は、一般の学生よりも多いために、異文化理解・異文化交流に対しての motivation は、かなり強い傾向を示していることが判明したように思われる。詳細は後述するが、入学当初の語学力は通常かなり低いとされる水産学部においても、指導を加えていくにつれて、かなり高等な英語による自己表現能力を育成することが可能である。

---

\* 鹿児島大学教育学部英語教育

## I 本研究の目的と方法及び仮説

### I-1. 目的と方法

本研究の主要目的は、緒言において述べたように、自己表現能力が弱いとされる日本人大学生が、水産学部海洋異文化交流論というひとつの特殊な講座において、どれほど異文化理解に対する態度を養い且つ英語による創作英作文の自己表現能力をどの程度育成できるのか、という指導実践である。指導対象となった学生は、鹿児島大学水産学部の3、4年次の学部学生23名であった。英語力のレベルは、入学当初は一般に低く、英語検定2級合格の水準に達する学生はあまり見られずTOEFL得点も有意のスコアと言われる400点には満たないが、入学後の水産学部での実用英語の特別授業や、海事英語の授業によって、少しずつ学力を向上させ、TOEFL500点、英語検定2級以上合格の学生も、若干見られる。また、留学生も多く、海外への乗船実習や研修により国際語としての英語力習得への motivation は、一般に他学部学生よりも高い方である<sup>3)</sup>。

指導方法としては、2000年度前期(2000年4月初め～7月末)の授業期間中において、最初の6回の授業の際に、インドネシア、コロンビア、中国、ミャンマー、パプア・ニューギニア等の国々からの留学生に授業に参加してもらい、ビデオ、スライド、OHPなどを使用しながら、それぞれの国々の実情について説明してもらった。使用言語は、日本語を若干使用したが、ほとんどの場合、国際学会での発表を想定して、英語を使用した。その点においても、いわゆる、ツールとしての国際語である英語の役割が実証され、受講生も国際学会の雰囲気にならなれたように思われる。また、日本人学生が理解困難な場合には、指導者であり、英語検定1級および英語通訳の資格を有する筆者が補足説明を行なった。

留学生の説明内容は、主に海洋・水産関係のものであったが、特に学生の興味を引いたものは、インドネシアからの留学生の説明で、インドネシアには大小17,500の島々があり、海岸線の長さは世界1であること、水産業もさかんで、agriculture から派生した、aquaculture が盛んでること、などであった。また日本にも、約6,800の島々が点在し、海岸線の長さも、インドネシアに次いで、世界第2位であるとの説明があり、その事実を我々日本人が全く知らず、留学生に教えられるところ大であった。インドネシアと日本の間には、島国で海洋立国であるという重要な共通点があり、まさに異文化交流によって、自国に対しての知識も深めることができる、という異文化理解・国際交流の意義を知らされた思いであった。

このような内容の授業を4月当初から5月末にわたって、合計6回実施し、海外事情の知識をインプットした。その後、6月から7月末までの8回の授業において、英作文の創作過程に重点を置くプロセス・アプローチ(Process Approach)、学生が作成した英文の修正や添削に重点を置くプロダクト・アプローチ(Product Approach)の両方の指導方法を駆使して、英文による異文化理解レポートの作成にあたった。

## I-2 仮 説

異文化理解や国際交流の機会が比較的多い水産学部学生を対象とした、創作英作文の指導実例があるので、学生側はかなりの興味を示すであろう、との予想がなされた。しかしながら、捕鯨問題や海洋水域問題、領土・領海問題などのデリケートな問題も多く抱えている分野であり、特に20歳前後の学生は、鯨肉を食べた経験はほとんど無いことが予想されたので、彼らがどのような考えを示すのかは、なかなか予想がつかなかった。

通常の英作文指導であれば、学生の英語による自己表現能力の育成が最も重要な指導内容であり、今回の研究においてもそれは間違いないが、それに加えて、異文化理解教育の場合、学生の主張の内容が同様に重要となる。もちろん、指導者による思想や内容の統制は行なってはならないし、行なうことはなかったが、「改善協」のビジョンにあるような、「広い視野をもって異文化を理解し、異なる文化や習慣をもった人々と偏見をもたずに自然に交流」できるかどうか、特に注目された。

## II 創作英作文の具体的指導事例の分析

次にいくつかの具体的な原稿を比較・分析し、検討してみよう。最初は和文による箇条書きの粗野な原稿であったが、次第に改善を加えて行くにつれて、創作英作文が完成していく。創作英作文作成の手順としては、まず最初に、箇条書きによる和文の下書きを作成し、次に少しずつ添削指導を加えながら、推考を重ね、最終英文を完成させていった。次の(1)は、3年次学生が最初にまとめた箇条書きの下書きである<sup>4)</sup>。

### (1)：和文原稿：奄美群島における琉球文化について

- (1) 日本には、少なくとも3つに民族が住んでいる。(大和, 琉球, アイヌ)
- (2) 今回は、その中でも奄美を通して、琉球の文化について述べる。
- (3) 大学の部活の合宿で、何回か沖縄・奄美に行った。
- (4) そのとき感じたことは、奄美群島は鹿児島県だが、文化的には沖縄であった。
- (5) そのことを気づいたきっかけは、昼休みに島の人が弾いていた楽器(三味)であった。三味は、別名琉球三味線とよばれるもの。
- (6) よくよく考えると、色々なことにおいて、奄美は沖縄文化であることがわかった。
- (7) 海は、珊瑚礁がとても発達していて、魚種が豊富である。
- (8) 漁業形態も奄美は沖縄と同じで多種漁業である。
- (9) 食事は、山羊と豚を好んで食べる。
- (10) 特に豚は、足先、耳に至まで食べ尽くす。
- (11) 代表料理にミミガー、ラフティー、ソーキ、チビチがある。

- (2) 島の人々の時間に対する考え方が、実にゆったりとしていて沖縄的である。
- (3) 宗教的には、沖縄の「ニライカナイ」という信仰が、奄美に伝わっている。
- (4) 文化を語る際に、宗教は大きなウエイトを占める。
- (5) 奄美は、沖縄文化圏に属する。

(1)においては、まだ箇条書きによる断片的な和文の羅列にすぎなかった下書きであったが、この下書きを土台として、数回の授業に渡って試行錯誤を繰り返し、接続詞や論理の展開も考慮にいられた英文を作成し、(2)の原稿が完成した<sup>9)</sup>。

## (2): About Ryukyu Culture in Amami Islands

Although many people think that Japan is a single race nation, but at least three races live in Japan. They are Ainu, Yamato, and Ryukyu. This time, I think that it will be written about Ryukyu culture, especially seen in Amami Islands.

I went to Amami and Okinawa five times for the training camp of my course (Marine Ecological Researching Society). Though Amami district belongs to Kagoshima prefecture, its culture is similar to Okinawa. The first thing that was noticed was an musical instrument called "sanshin." A man of the island was playing it at noon. I thought the instrument was peculiar to Ryukyu district, but the fact is different. Amami Islands had similar culture to Okinawa. I found the fact for the first time.

When I think well, I noticed that Amami district belongs to Ryukyu culture in many ways. In the sea, coral reefs develop and many kinds of fish are swimming. The fish living near Amami can be seen around Okinawa as well. Therefore, the fish group in Amami is the same as Okinawa.

About food, they often eat goat and pig meat; especially, they eat the feet and ears of pig. There are "mimigar", "rafuti", "soki", "tebichi", and so forth as representative cooking. These dishes are also liked in Okinawa.

About time, the way of thinking about time is quite like Okinawa. They don't hurry up or make haste.

About religion, the faith of the name of "Niraikanai" was introduced to Okinawa long time ago. Then, this was conveyed to Amami, too. Religion is a very important part of culture, so we may conclude that Amami group of Islands belongs to Ryukyu culture.

(水産学部3年次学生による作成途中のオリジナル英文原稿：下線部は筆者による加筆である。)

(2)によって、かなり英文らしい原稿となったが、下線部に指摘されるように、まだまだ稚拙な表現も随所に見られた。その後さらに試行錯誤を重ね、添削・修正を数回の授業にわたって実施し、次の最終英文原稿(3)が完成した。

### (3) : On the Influence of Ryukyu Culture over Amami Islands

Although many people may think that Japan consists of a single race, there are at least three races living in Japan; they are Ainu, Ryukyu, and Yamato. This paper deals with the influence of Ryukyu culture over Amami Islands.

I have been to Amami and Okinawa several times for the workshop of our course activity (Marine Ecological Researching Society) of the university. The district of Amami Islands belongs to Kagoshima Prefecture at present, but its culture is quite similar to that of Okinawa. The first thing that I noticed was an instrument called "jami", with which a native man of the island was singing a song after lunch time. Before I saw him playing just in front of me, I had thought that the instrument was peculiar to Ryukyu, or the district of Okinawa. But that was not true. The culture of Amami Islands is quite similar to that of Ryukyu. I found the fact for the first time in my life in person.

When I thought of the fact over and over again, I noticed that there are many other aspects in Amami culture which are quite similar to those found in Ryukyu culture. For example, under the sea, in both Amami and Okinawa, coral reefs develop. The fish living along the coast of Okinawa are usually seen in the sea of Amami as well. And what is important in this point is that, in Amami and Okinawa, the way of catching fish is the same.

As for meal, both in Amami and Okinawa, they often eat goat and pig; especially, they eat up the feet and ears of a pig. "Mimigar", "raftyi", "soki", "tebichi" are their favorite ways of cooking.

The conception about time is quite similar. Both in Okinawa and Amami, they do not hurry up or make haste. They take time in everything they do.

Finally, the peculiar religious faith, called "Niraikanai", was introduced to Okinawa in ancient days, then it was introduced into Amami. Religion is one of the most important aspects of culture, so I came to the conclusion that the culture of Amami can be included to that of Okinawa.

(水産学部3年次学生作成による完成オリジナル英文原稿)

このように、2カ月近いプロセスおよびプロダクト・アプローチの経過を経て、稚拙な和文による箇条書きのメモから、30行近い、異文化理解をテーマとした創作英作文が完成した。尚、指導上の注意としては、学生の主張内容に関しては、思想的な統制は一切行なわず、出来るだけ学生のオリジナル原稿を尊重し、文法・語法上の誤りの訂正や指導・助言のみを行なった<sup>6)</sup>。

次に、水産関係の国際問題としての捕鯨問題や異文化間の食生活の問題について取り扱ったレポートの最初の和文原稿と、最終英文原稿を検討してみよう。

#### (4) 和文による下書き：韓国の文化について

昨年の春、乗船実習で韓国のプサンに入港した。そこで学生交流会が行なわれ、韓国の大学生と仲良くなることができ、いろいろなことを話すことができたので、同世代の韓国の文化と食文化について書いてみたい。

韓国の大学生についてまず思ったことは、大部分の学生が、日本人学生と比べ、はるかに英語力があり、勉強熱心な感じがした。今でこそ、日本の方が経済的には豊かであるが、将来抜かれてしまうのではないかと、思ったほどだった。また、儒教の関係もあり、目上の人への態度がきちんとしていた。例えば、同席した目上の人がお酒を飲み始めるのを待ってから飲み、その人がタバコを吸わなければ、自分は、普段は吸っていても、そのときには吸わないのである。また、音楽や本、アニメなどは、日本から入ってきたものが多かったように感じた。

次に韓国の食文化についてであるが、韓国の食物は、キムチ、クッパ、焼肉をはじめとして、日本でもよく知られており、人気もある。私は焼肉を食べたが、日本とは食べ方が違っていった。鉄板で焼いた肉をレタスに巻いて辛い味噌をつけて食べたが、とてもおいしかった。

また、聞くところによると、犬肉料理も食べるとのことだが、ソウルオリンピックのときに、外国人に残酷なイメージを与えないように、犬肉料理専門店の看板をはずさせたり、閉店させたりしたらしい。自国の文化を、日本の捕鯨問題のように批判されるのが嫌だったのだろうか。

文化について、外国から批判される筋合いはない。自国の文化にもっと誇りを持ってもいいのではないかと思った。

(水産学部4年次学生の作成による、オリジナル和文下書き)

#### (5) 英文による最終原稿：On Korean Culture

Last spring, I went to Pusan in Korea during the cruising practice. In Pusan, a welcome reception was held, and I could make friends with some University students in Korea talking about many things. In this paper I would like to write about Korean culture and its food culture of my generation.

I found that their command of English is by far better than that of most Japanese students. In addition to that, they study much harder than Japanese students; their

attitude was very serious. At first I thought that Japan is richer in economy than Korea at present, but I could not help thinking that the situation would be contrary in the future.

Furthermore, there can be found some influence of Confucianism, and the Korean people are very respectful to senior citizens. For example, they do not drink alcohol till the senior persons, sitting at the same table, begin to drink. The juniors, who usually smoke, do not smoke, if the seniors at the same table, do not smoke. As for other things, I found many things from Japan, such as music, books, animation etc.

Next, I would like to write about Korean food. Korean food is well known and very popular in Japan, too. Especially, KUPPA, kimuchi, "yakniku" are well known. I ate "yakniku" in Korea, but the way of eating was different; The meat cooked on the iron plate was wrapped inside lettuce, and with hot "miso" on the vegetable, they eat the food. It tasted very good.

And we hear that they eat dog meat in Korea. But during the Seoul Olympic games, at the restaurants, where they served dog meat, they had to close or remove the signs for a while. They must have thought that they should avoid giving an cruel image to the foreign visitors. Did the Korean government dislike being criticized, considering that Japan's whale catching is criticized by many nations?

I think that there is no right to criticize the culture of other countries. We should have pride in our own culture.

(水産学部4年次学生によるオリジナル最終英文原稿)

### III 結 論

以上本研究において、水産学部海洋異文化交流論の授業での、異文化理解のための創作英作文の指導実例が例示された。捕鯨問題や海洋水域、領土問題などの困難な内容を抱える特殊な分野であるが、学生の motivation はかなり高かった。学生の主張する内容も、「改善協」の提言と一致するものが多く、水産学部での取り組みが、これからの異文化理解・国際理解教育への、ひとつの成功例と成り得るのではないかと期待するところが大きい。異文化理解という特殊な主題により、創作英作文の育成と自己表現能力の育成の融合が可能である。

尚、巻末に、appendix として、異文化理解に関する、興味深い3編の創作英作文の実例を列挙しておく。異文化理解の教材として、何らかの参考となり得れば筆者として幸いである。

### ＜註＞

- 1) 詳細は、大修館『英語教育 Vol.49』(2000) 4月号「特集：これからの異文化教育」参照
- 2) 鈴木(1999)において、日本および日本人が置かれた、歴史的・地理的・社会的特殊性について、詳細な記述がある。また、鈴木(1973)および鈴木(1990)には、衣食住にわたる様々な異文化理解にとつての興味深い記述がある。
- 3) 英語の学習意欲に関しては、安藤(1991)、垣田(1993)、鹿教組(1996)などの該当項目を参照。
- 4) 本来は、創作英作文の作成であるから、その創作課程においては、母国語である日本語はあまり介在させたくはなかったのであるが、最初から英文による下書きはできない、と主張する学生の意見も多かったので、和文による下書き作成も認めることとした。もっとも、中には、最初から英文による下書きを書いてくる学生も見られた。その事例は、Appendixを参照。
- 5) プロセスおよびプロダクトアプローチに基づく創作英作文の指導方略については、坂本(1999)、坂本(2000)、垣田(1985)などを参照。
- 6) 異文化理解の授業実践や方法に関しては、那須(2000)は、「異文化理解教育では、学習者は目標文化と自国の文化を比較し対比することにより、文化の概念を説明したり、文化の現象を理解することが期待される。」としている。概ね、異文化についての理解や偏見の排除、寛容さを主張することが、重要であるとの主張である。詳細は参考文献を参照。

### 参 考 文 献

- 安藤昭一編集(1991)『英語教育 現代キーワード事典』 大阪：増進堂
- 英語科教育実践講座刊行会(1992)『ECOLA 英語科教育実践講座』 第8巻 「英語教育と国際理解」  
東京：ニチブン
- 英語教育編集部(2000)「鈴木孝夫氏に聞く：発信型英語教育とは」『英語教育 Vol.49』 4月号 pp.8-10  
東京：大修館
- 垣田直己監修(1985)英語学習モノグラフシリーズ『英語のライティング』 東京：大修館
- 垣田直己監修(1993)英語教育モノグラフシリーズ『英語の学習意欲』 東京：大修館
- 鹿児島大学教職員組合編集(1996)『地方大学の教育実践 -がんばる鹿児島大学の教師たち-』鹿児島：鹿児島学術文化出版局
- 松本青也(1998)「異文化理解の目標と方法」『現代英語教育』12月号 pp.10-12 東京：研究社  
萬戸克憲(1998)「国際理解と英語教育」『現代英語教育』12月号 pp.6-9 東京：研究社
- 那須恒夫(2000)「異文化理解教育を英語授業にどう取り入れるか」『英語教育 Vol.49』 4月号 pp.11-13  
東京：大修館
- 日本外国語教育改善協議会(2000)「日本の外国語教育の改善に関する提言(前)」『英語教育 Vol.49』 4月号 pp.47-49 東京：大修館
- 坂本育生(1999)「大学新入生に対しての創作英作文の指導方略-完了時制の用法を中心として-」  
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第9巻 pp.139-145
- 坂本育生(2000)「大学新入生に対しての自己表現能力育成の指導方略-少人数教育における創作英作文とスピーキングの指導を中心として」 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第10巻 pp.119-125
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』 東京：岩波新書  
鈴木孝夫(1990)『日本語と外国語』 東京：岩波新書  
鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないか』 東京：岩波新書

## Appendix 1.

### (A) 和文による原稿：

国際化という言葉をしばしば耳にする世の中にあっても、現在の日本では、実際に異文化というものに触れる機会は、今のところほとんど無い。中学校や高等学校で行なわれている「異文化交流」は、週に一度外国人の先生の授業を受ける程度で、その授業といっても、挨拶程度の英語と、英語の授業にありがちな、つまらな

い「ゲーム」をするくらいのものであった。また外国人の先生も、映画で見るとようなアメリカ人かイギリス人がほとんどで、欧米の文化のみであった。

映画館で上映される映画も、ハリウッドのものばかりで、音楽にしても、欧米の影響を多分に受けたものが少なくない。その反面、アジアや南米、アフリカなどの国々については、どのくらいの理解があるだろうか。まさに、現在の国際化とは、単なる欧米化とでもいうように、なっていないだろうか？

以前、ニュージーランドに行ったときに、バスの行く先すら聞いてもわからない、という事実には唖然としてしまった。しばらくして、乗客の中の数人が話していることに気づいた。英語に訛りがあるということは、本などで読んだことはあったが、実際にそれを聞いてみて、初めて「ああ、母音を異様に強調しているのだな」と知った。それ以降、英語の訛りというものが、何となく分かるようになった。これなどは、学校に派遣されてくる外国人の先生からは、到底学び用が無い。英語圏であっても、実際に行ってみると、余りにも知らないことが多く、戸惑うばかりであった。やはり、異文化交流というものは、その文化の中にどっぷり漬かるか、少なくとも1対1くらいで接しはじめて意味のあるものになるのではないだろうか。

しかしながら、今回の講義で、インドネシアからの留学生の話しを聞く機会があったが、それまでは、インドネシアに対しては、バリ島、宗教対立による多国籍軍の派遣、といったイメージしかもっていなかったが、こういう機会があるだけで、随分その国の印象が変わってくる。国際化とは、ただ単に外国に旅行に行くようなことではなく、隣に外国人が引っ越してくることである、ということを知ったことがあるが、そのためには、まずそれぞれの自分の国の文化を少しでも知り、また外国人を受け入れるためのキャパシティを持ってること、それが異文化交流の第一歩となるのではないだろうか。

#### (B) 英文による最終原稿：

Recently, the word "internationalize" often reaches our ears. But there are few opportunities to get in touch with other cultures. It is true that Japanese students at junior or senior high-schools are receiving English training. The English classes have "cultural exchange" time in which foreign teachers give special lessons. But, almost all the teachers are like movie stars from USA. And the details of the lesson only deal with daily greetings or dull English games. Can that be called real cultural exchange?

Japanese movie scenes are captured by Hollywood's movie stars. And so many Japanese musics are affected by USA or European countries. On the other hand, how many movies produced by other cultures except Japan or United States have we watched? How many singers we know are from other foreign cultures; Asian African or South American? I am afraid that recent Japanese internationalization may be thought of as "Americanization."

When I went to New Zealand, some years ago, I had a hard time trying to make myself understood. I could not even understand the place where the bus was going. That was a very awkward thing. But after I realized that they speak English with a local accent, the dialect was found on a corner of the English textbook. But when I faced it actually, I understood that the vowel sounds were stressed. Such things cannot possibly be learnt in the usual English classes in Japan. We ought to know that there are varieties of English. But actually, in New Zealand, I was perplexed at so many strange things.

If we want to get real experiences of cross-cultural communication, we should go into the culture directly, or get a man-to-man talk with the local people. Fortunately, an Indonesian student was invited to this course. He gave me a different impression of Indonesia. I only knew that Indonesia has a serious religious conflict, or it is famous for its resort island Bali. But the student indicated that he did not think of the religious problem so seriously; and taught us that there are so many islands that are unknown to many Japanese people.

I have heard that "Internationalization is not only to travel to foreign countries, but to get neighbors from foreign countries. So we must try to appreciate the cultures of foreign countries and have acceptable capacity of such culture. I think that such attitude will be the first step of "cultural exchange."

## Appendix 2.

### (A) 和文原稿：

日本と諸外国の文化の違いが見られるもののひとつとして、鯨への考え方が存在する。日本では古来から鯨を大切な食料源として摂取し続けてきた。しかし、米国を筆頭とする、食さない国々も存在する。何が日本と異なるのか？

日本は、昔から漁業中心の文化であったため、海で生活している鯨を食するのは、当然のことであった。しかも鯨肉は量が多いに加え、ステーキ、ベーコンまた刺身にするなどバリエーションが豊富であったため、日本人の鯨肉からのタンパク質摂取量は、少なくとも5%はあったと言われている。これほどに重宝されている鯨肉を、なぜ外国人は摂取しないのだろうか？

欧米には、動物愛護で捕鯨に反対する団体が存在する。かつては、大量捕鯨国であった米国が、この団体に加盟したのには、大きな理由がひとつある。それは、大量捕鯨により、鯨の数が減少してしまったからである。また今では、捕鯨禁止の理由のひとつに、鯨は他の動物よりも利口だという主張も存在するようだ。利口だから捕獲しないという考え方は、私自身理解できない。それが理由と成り得るのだろうか？ また、現在の捕鯨禁止のため、鯨は随分増えてきている。それでも捕鯨禁止を訴える必要があるのだろうか？

このような考えの違いを異文化と呼ぶのだけれど、牛や豚などを食しているのに、鯨を殺すのは残酷だという欧米の考え方は、矛盾していると私は思う。

### (B) 英文による最終原稿：

There is one of cultural differences between Japan and other countries; it is the different ways of thinking about whales. The Japanese people have been eating whales as an important food from old days. But, on the other hand, there are some countries like America, where they do not eat whale meat. What are the differences?

In the old days, the Japanese people naturally ate whales which lived in the sea, because Japanese main culture was from fisheries origin. Besides, whale meat is large in quantity, and it has many cooking variations; the examples are stake, bacon, sashimi and so forth. It is said that at least 5% of Japanese people's protein intake was from whale meat. So, I wonder why many westerners do not eat whale meat, when it is so highly valued by the Japanese?

In Europe and America, there are some groups, appealing "Do not catch whales." America was once No. 1 in whale catching; but now, USA is one of the main nations which are against whale catching. There was a big reason; it was that the number of whales decreased as the result of mass whale catching. In addition to that, there is another reason; they insist that whales are cleverer than other animals, so whales should not be eaten. But I cannot understand such ideas. Can the fact that whales are cleverer than many other animals be a reason that whales should not be eaten?

Actually, the number of whales has been increasing in these days, as a result of whaling moratorium policy. So I wonder if setting whaling moratorium is necessary in such situation.

Such different ways of thinking can be called "culture shock", or "cultural differences". I think that American ideas toward whale catching is quite contradictory in that they kill and eat cows, pigs and many other animals and birds in nature.

## Appendix 3.

### 英文による最終原稿

Thanks to many foreign students studying in Kagoshima University, my world has become wider. And I got a kind of "culture shock." I really felt that culture is deep and wide. Not to mention the differences of languages, the ways of living, clothings, are quite different in each country. Among such many differences, I got interested in "religion" most.

In Japan, many people think that religion is vague, except for some people. We hold funerals in temples, and also celebrate Christmas. For this reason, I think that religion is mixed up so well in Japan, and that such devoted people are great.

I also find some trivial troubles happening from religious differences. I think they are caused by devoted religious people. I really wish that the attitudes of such devoted people should be changed; each one should go back to the origin of each religion. I do wish the eternal world peace from the depth of my heart.

Nowadays, I feel that foreign countries are very close to Japan. When I was a child, I felt really envious to a friend who went abroad, but now, we can go to foreign countries without difficulty. And many foreign students are studying in Kagoshima University with us. Some of them came to this course and talked about their countries, cultures, and customs. During the class, I felt my English is not enough; while the foreign students are very good at English, although English is not their mother tongue. Their speech was very interesting. Generally, the Japanese people are too shy to express their ideas, but such attitude may give dangerous impact to foreigners. I think that the Japanese should go overseas more often, and learn the cultures and customs in person. Then we will be able to get along with each other more friendly. Although cultures, customs, languages and the color of the skin may be different, we are all brothers.

(本原稿には、和文の下書きはなく、最初から英文による修正・添削を経て完成したものである)